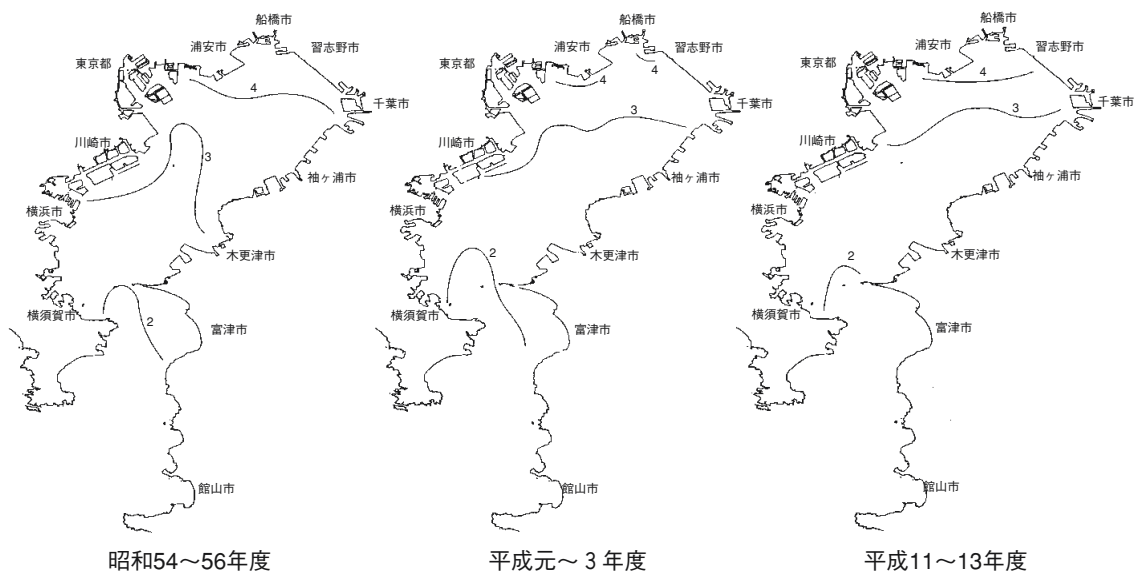


3. 海域環境の保全・再生

(東京湾の水環境の現状)

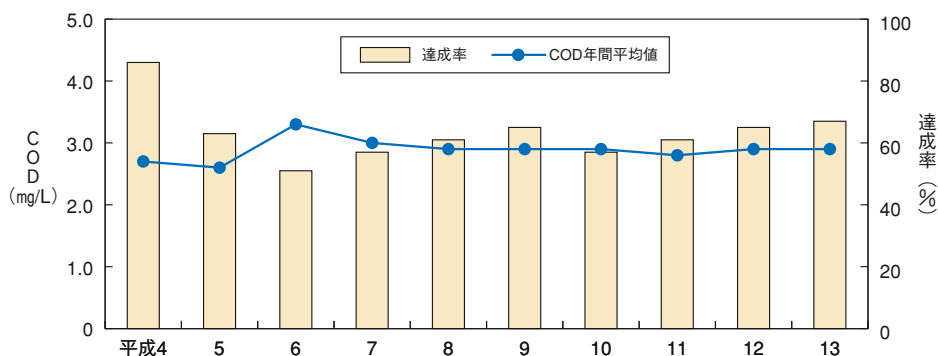
東京湾の水質について見ると、COD、T-N（全窒素）及びT-P（全リン）のいずれも湾奥部の東京港周辺が最も高い濃度を示す海域となっている。約20年間の水質状況の推移からはCODの高濃度域の減少など一定の改善が見られるものの（図1）、環境基準達成率は、60%強のレベルでほぼ横ばいとなっている（図2）。また、赤潮は春期から秋期を中心に湾奥部で発生し、近年では年に40～60回程度確認されている。青潮の発生は、千葉県側の海岸線付近のみで年間2～7回程度確認されており、青潮の発生規模によっては、漁業被害が生じる場合もある。

図1 東京湾におけるCOD分布の変化



備考：各環境基準のCOD年間平均値をもとに濃度分布図を作成した。COD年間平均値は3年間の平均値を用い、等濃度線の単位は（mg/L）である。陸岸は、現時点のもの。
資料：「平成13年度公共用水域水質測定結果」（環境省）

図2 東京湾におけるCOD及び環境基準達成率



資料：「平成13年度公共用水域水質測定結果」（環境省）により国土交通省国土計画局作成

(陸域からの汚濁負荷の削減)

水質汚濁防止法に基づく総量規制の実施、下水道など污水处理施設の整備及び高度処理の導入並びに合流式下水道の改善を推進するとともに、平成14年度には流域全体の効率的な汚濁負荷削減のための費用負担の方法について検討している。また、浚渫や河川直接浄化施設等の設置、湿地や河口干潟の再生を推進するほか、間伐の実施や複層林の造成等の森林の整備・保全、貯留・浸透施設の設置等を実施している。

(海域における環境改善・自然再生の推進)

運河等の湾奥部を中心とした堆積有機物をはじめとする底泥の除去（汚泥浚渫）、良質な土砂を用いた底質の改善（覆砂）や、海面浮遊ゴミ・油の効率的な回収を効果的に推進している。また、干潟・浅場等の保全・再生・創造等、自然再生への取組を進めている。平成14年度には、海域浄化実験、藻場・汐入等の造成実験や、地域住民やNPOとの協働等の取組が実施されている。

(東京湾のモニタリングの充実・強化)

底層のDO（溶存酸素量）及び底生生物のモニタリングの充実、モニタリングポスト及び船舶等による海潮流及び水質のモニタリングの推進、人工衛星による赤潮等の挙動のリアルタイムでの把握といった取組を進めるとともに、これらの関連情報を集約したWebサイトを整備する。また、地域住民と協同した海浜清掃及び漂着ゴミ分類調査の実施や、市民やNPOとの連携を強化する。

合流式下水道の改善



干潟・藻場等の自然再生



船舶・浮標によるモニタリングと情報発信



河口干潟の再生



浮遊ゴミ・油の回収

